

国立民族学博物館 友の会ニュース

MINPAKU ASSOCIATES NEWSLETTER

No. 255
2020.1 ▶ 2

「国立民族学博物館友の会」は「みんぱく（国立民族学博物館）」の活動を支援し、博物館を楽しく、積極的に活用するためにつくられました。

発行日 2020年1月1日
編集・発行 一般財団法人千里文化財団

本年も国立民族学博物館と国立民族学博物館友の会を よろしく願いいたします。

本年は、70年大阪万博から50年の節目にあたるとともに、梅棹忠夫 国立民族学博物館初代館長の生誕百年をむかえる年となりました。当財団では、世界各地で顕在化する異文化への不寛容やさまざまな環境問題等にむきあい、未来に切りひらくべく文化人類学・民族学の普及ならびにその研究拠点である国立民族学博物館の活動支援に一層つとめてまいります。引き続き変わらぬご支援をお願い申し上げます。

/// 館長より新年のご挨拶 ///

新しい年、二〇二〇年には、八月から東京オリンピック・パラリンピックが開催されますが、それに先立ち、四月には、北海道・白老にアイヌ文化復興・創造の拠点として、国立アイヌ民族博物館と民族共生公園から構成される「ウポポイ（民族共生象徴空間）」が開設されます。じつは、過去約五〇年間、オリンピックの開催とその国の先住民族をめぐる動きは、密接に結びついてきました。

民博でも、この動きと連携するかたちで、三月九日（木）から六月二日（火）にかけて、アイヌの人びとを含め世界の先

あけましておめでとうございます。
本年もどうぞよろしく
お願いいたします。



住民族の「宝」に焦点を当てた特別展「先住民の宝」を開催します。

九月から十二月にかけては、特別展「ニバーサル・ミュージアム」——『未開の知』に触れる（仮称）を開催することになっています。視覚偏重のミュージアムのあり方を再考し、「障害」をあたりまえとする価値観・世界観を博物館を通じて実現しようという意欲的な取り組みです。

さらに、年度の末、来年三月には、電子ガイドとビデオテークが連動し、サイバー空間ともつながった次世代の展示情報提供システムも、本格導入が始まります。

誰もが誇りをもって生きることができ、誰ともつながりあって生きることのできる空間と社会の実現に向けて、民博の館員は皆、日々の活動に専心しています。

今後とも、開かれた博物館づくりに精進してまいります。

友の会の皆さまの引き続きのご支援を心よりお願いいたします。

新しい年が皆さまにとりまして
実り多い年でありますよう、
お祈りしております。

国立民族学博物館長 吉田憲司

吉田館長が第500回みんぱくゼミナールに
登場します！

文明の転換点におけるミュージアム

——みんぱくのこれまでとこれから

講師…吉田憲司（民博館長）

日時…2月15日（土）13時30分～15時

会場…本館2階 講堂

コレクション展示

朝枝利男の見たガラパゴス ——1930年代の博物学調査と展示

期間：1月16日（木）～3月24日（火）
会場：本館 企画展示場の一部

写真家、画家、博物館の学芸員として米国で活躍をした朝枝利男は、1930年代に探検隊の一員としてガラパゴス諸島（南米エクアドル）に足を踏み入れました。本展示では、1987年にみんぱくに寄贈された、朝枝利男の写真、スケッチ等資料のなかから、ガラパゴスにおける探検に焦点を当てて紹介します。

友の会でも関連する企画を
予定しています！

『季刊民族学』171号

「朝枝利男の見たガラパゴス」

※1月下旬発行予定。
特集は「先住民のいま」です。

第497回友の会講演会

「博物学者 朝枝利男の生涯を追う」

日時：2月1日（土）13:30～14:40

会場：本館 第5セミナー室

※講演会の詳細は3ページをご覧ください。



まもなく開幕！

ガラパゴスでパイプをふかす朝枝利男（フロレアナ島ブラックビーチ、1932年）。国立民族学博物館蔵

もののけ怪道をゆく ——稲生物怪録と小泉八雲を歩く

講師：植田 千佳穂（三次市学芸アドバイザー）、小泉 凡（小泉八雲記念館館長）
山中 由里子（民博教授）

期間：2019年10月13日(日)～14日(月・祝)

みんなの特別展「驚異と怪異——想像界の生きものたち」の開催に併せて、怪異譚「稲生物怪録」の舞台となった広島県三次市と『怪談』の作者 小泉八雲（ラフカディオ・ハーン）が不思議な話を蒐集した島根県松江市を訪問しました。物語に登場する実在の地を歩きながら「怪異」が生まれる地理・環境的背景とともに、それを見出してきた人びとの心の働き（自然観や宗教的思想との結びつき、霊的な存在に真理を見出す心）についても考えることのできた旅でした。また、湯本豪一記念日本妖怪博物館（三次もののけミュージアム）、小泉八雲記念館の訪問を通して、妖怪や怪異譚が地域資源として生かされる状況を知る機会にも恵まれました。



三次町の氏神、太歳神社。『三次実録物語』では「稲生物怪録」の主人公 平太郎はこの神社から比熊山に登ったという。



八雲の作品「飴を買う女」に登場する母親の幽霊の墓がのこる大雄寺。

参加者の感想

小学生の頃、「怪談」を繰り返し読んだ時期がありました。以来、小泉八雲は私の心にしっかりと根を下ろしています。今回、八雲の曾孫の小泉凡氏の案内という願ってもない機会に迷わず参加しました。「怪談」が生まれたのは、八雲が子どもの頃から昔話に親しんだからと納得できたのはもちろんですが、八雲の血をひく人を前にして、物語が生まれ、引き継がれていく時の流れを実感することができ、深い満足感を覚えました。旅も終わりに近くなつて、子どもの頃、なぜあんなにも繰り返し「怪談」を読んだのだろうかという疑問が頭をもたげました。繰り返し「怪談」を読むことで、この旅をきっかけに知った「稲生物怪録」の主人公の平太郎のように、日々妖怪に出会っていたのかも知れません。なくしたパズルのピースを見つけたような、何かに導かれたような不思議な旅でした。

（土屋佳英子さん）

行程

13日（稲生物怪録の舞台を歩く／広島県三次市）

湯本豪一記念日本妖怪博物館→妙栄寺→稲生武太夫碑→太歳神社

14日（小泉八雲の物語世界を歩く／島根県松江市）

小泉八雲記念館→城山稲荷神社→月照寺→大雄寺→八重垣神社→小泉八雲朗読の調べ（希望者のみ）

東京講演会 実施報告

■第127回■9月14日(土)

会場：国立音楽大学7号館2階多目的室

国立音楽大学楽器学資料館

世界の楽器を探る

福岡 正太（民博准教授）

比較音楽学は、世界の音楽を体系的に研究することを目的として、一九世紀末に始まりました。その重要な部分を占めたのは楽器の研究です。欧米諸国が世界各地へと勢力を広げるなか、世界中の楽器が欧米の博物館に集められてきました。研究者たちは、ヨーロッパのオーケストラを前提とした管・弦・打という三分類法では、これらの楽器を体系的に分類できないことに気がつきます。そして、何が振動して音を発するのかに注目して、体鳴楽器、膜鳴楽器、弦鳴楽器、気鳴楽器という四分類法を考案しました。

二〇世紀前半の比較音楽学者たちは、世界各地で丹念に楽器を調査し、記録していききました。それらの成果は、世界の楽器の系統を明らかにする研究なども生み出しました。しかし、二〇世紀の半ば以降、比較音楽学は民族音楽学と名前を変え、文化人類学の影響を受けながら、特定の社会や文化における音楽を深く研究する方向にシフトして



棒ツィター（ラオス）。同種の楽器はインドから東南アジア各地に広まった。

■第496回■

中国に生きる
ムスリムたち

講師：奈良雅史（民博准教授）

日時：1月11日（土）13時30分～14時40分

中国には約二〇〇〇万人のムスリムが暮らしており、その約半数を回族とよばれる人びとが占めています。彼らはおもに唐代から元代にかけて中国にやってきた外来ムスリムとイスラームに改宗した漢人との通婚を通して形成された民族集団とされており、中国全土で漢人と隣り合いながら暮らしてきました。本講演では、回族の歴史と文化について紹介したうえで、宗教教育を事例に彼らが中国共産党政権下でいかにイスラーム信仰を続けているのかを考えます。

※講演会終了後、講師を囲んで懇談会をおこないます（40分）。

■第497回■

「コレクション展示」朝枝利男の見たガラパゴス
——1930年代の博物学調査と展示「関連」
博物学者
朝枝利男の生涯を追う

講師：丹羽典生（民博准教授）

日時：2月1日（土）13時30分～14時40分

戦前の博物学者 朝枝利男の生涯について、これまでの調査からわかってきたことを紹介します。日本における修行時代の姿からアメリカへの留学、そして探検隊としての活躍など、朝枝本人が残した多くの文章、写真や絵画を整理しながら考えていきます。彼は裏方的な仕事をしていたため忘れられがちであるものの、幅広い人脈のなかにいたこと、ガラパゴスからソロモン諸島まで貴重な資料を生み出してきたことがわかります。

※講演会終了後、コレクション展示の見学会をおこないます（40分／要会員証もしくは展示観覧券）。

■第498回■

災害を伝える

講師：林 勲男（民博教授）

日時：3月7日（土）13時30分～14時40分

二〇二〇年一月一七日で、阪神・淡路大震災から二五年となります。この間だけでも、国内外で多くの災害が発生し、そのたびに体験や教訓を伝えていくことの大切さが叫ばれてきました。一月末に神戸で開催される「世界災害語り継ぎフォーラム」のお話をまじえながら、「災害を伝える」ことについて、そのさまざまな試みや課題について考えてみましょう。

※講演会終了後、講師を囲んで懇談会をおこないます（40分）。

2020 世界語り継ぎフォーラムの詳細はこちら
<https://tell-net.jp/forum2020/jp/>

■第128回東京講演会■

消滅の危機に瀕した言語

講師：吉岡 乾（民博准教授）

日時：1月25日（土）13時30分～14時40分

会場：モンベル御徒町店4Fサロン（定員：60名）

二〇一九年は国際先住民言語年でしたが、日本ではほとんど話題になりませんでした。世界では数千もの言語が話されており、何億人も話すものも、数人しか話さないものもあります。近年、消滅の危機に瀕した言語についての意識が、少なくとも一定数の研究者間では高まっており、さまざまなアクションが起こされてきています。本講演では、実際に危機言語も調査している講師とともに、改めて危機言語というものを考えます。

※講演会終了後、講師を囲んで懇談会をおこないます（40分）。
※要事前申込／会員：無料、一般：500円

○ハガキ、FAX、受付フォームにて事務局までお申し込みください。
実施1週間前を目安に参加証をお送りします。

●受付フォーム

<https://www.send-for.jp/128tokyo/>

イベントスケジュール

■コレクション展示「朝枝利男の見たガラパゴス——1930年代の博物学調査と展示」

1/16（木）～3/24（火）

※年末年始休館日

2019/12/28（土）～1/4（土）

●友の会講演会

1/11（土）奈良雅史 2/1（土）丹羽典生

●みんなくゼミナール

1/18（土）宇田川妙子 2/15（土）吉田憲司

●みんなくウィークエンド・サロン

1/12（日）卯田宗平 1/19（日）藤本透子

2/16（日）山本泰則 2/23（日）園田直子

●その他の催し

1/11（土）、1/12（日）

みんなくワークショップ「飛び出す獅子舞 福ぬりえ——つくって かざって 厄ばらい！」

1/19（日）

みんなくワークショップ「ハンティの文様の世界——フェルトのコースターづくり」

2/11（火・祝）

みんなく映画会「廻り神楽」

【館外での開催】

【大阪】

●1/11（土）1/25（土）2/8（土）2/22（土）
みんなく映画会／みんなく映像民族誌シアター（淀川文化創造館）

●2/28（金）公開講演会（オーバルホール）

【東京】

●1/25（土）東京講演会 吉岡 乾

◆都合によりスケジュールが変更になる場合があります。

◆イベントの参加には必ず会員証をご持参ください。

会員による会員のための学習機会
みんなく友の会雑学サロン

・1/18（土）雑学☆発表会「エリザベス1世について」
・2/15（土）ぶらぶら民族学「大山崎と明智光秀」説明会

日時：第3土曜日 15:30～16:30

場所：本館2階第7セミナー室

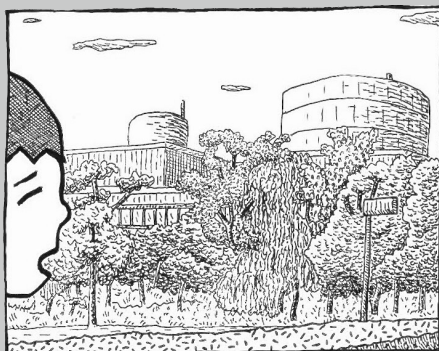
申込不要

会場にて友の会会員証、フリーパスをご提示ください。

問い合わせ先：田和、谷北、山本（実行委員）
zatsugakusalon@gmail.com

ぼくのみんぱく日記

画・中川洋典



十二月十六日（月）
みんなくが見
エル場所ニ
ヤッテ来ルト、
急ニ心ガザ
ワメキマス。
不思議ナ
コトデスヨ。

■第493回■10月22日(火・祝)

【特別展「驚異と怪異——想像界の生きものたち」関連】

対談 幻獣！——そこに在る「不思議な生きもの」

湯本豪一(妖怪・幻獣研究者)

山中由里子(民博教授)

特別展で紹介されていた「湯本コレクション」の収集者、湯本豪一先生をお招きし、特別展実行委員長の山中由里子先生と対談していただきました。展示場内のコレクションスペースでは、幻獣のミイラや骨が展示されていました。

湯本先生が資料を集め、妖怪に特化した「湯本豪一記念日本妖怪博物館(三次もののけミュージアム)」を設立するまでに至ったのは、収集することの必要性を長年意識し続けてきたためだといいます。妖怪研究の分野は明治時代からありましたが、資料の収集は重要視されていませんでした。散逸を防ぎ、その解明を後世に引き継ぐためにも、収集することが必要だと考えられたそうです。

一方、江戸時代を中心に、信仰の対象や薬として利用された幻獣は、寺社などに「集められる」ものでもありました。見世物にも利用され、幕末から明治にかけては海外に輸出されることもあったといえます。いまでは日本にはない幻獣資料もあり、海外の博物館が収蔵する資料も視野に入れた研究が期待されます。

幻獣は、その存在の物的証拠として、ミイラや体の一部が捏造されることがありました。オニを例にあげると首や腕が多



湯本先生と山中先生の対談の様子。

多いのですが、これは酒呑童子や茨木童子といった、誰もが知っている話の影響が考えられるそうです。また、近代的合理主義によつて、科学的に証明できない幻獣たちが否定されてしまう以前には、災いを未然に知らせる予言獣の存在も信じられていました。幻獣に、その存在を信じた人びとの社会や文化、歴史的な背景をさぐるものが湯本先生の研究の根幹にあるということでした。

最後に、妖怪、幻獣、お化けの類を一括りにせず、世界との比較のなかで、いるかもしれないものの存在をとり上げた今回の特別展を湯本先生に評価していただき対談を終りました。(文・事務局)

■第494回■11月2日(土)

マウシムを生きる人びとの歴史

——一九世紀ペルシア湾の生業、交易、移動

鈴木英明(民博助教)

この講演会では、ペルシア湾岸地域を対象に、石油資源の開発以前の時代、一九世紀を中心に、二〇世紀前半までを視野に入れて、特に季節風とのかかわりのなかで人びとがどのように暮らし、それがこの地域の外の世界とどのようにつながっていたのかをお話ししました。

マウシムというのは、季節風モンスーンの語源に当たるアラビア語で、季節とか祝祭を意味します。ペルシア湾岸の場合のマウシム、すなわち季節は、風向きによつて人びとに感知されます。風の向きが変わること

は、人びとに移動の時期が来たことを意識させ、その移動には出会いや別れ、再会が連なります。これは遊牧民や船乗りたちばかりでなく、定住民についてもいえることです。それだけではありません。季節風に影響される移動はこの地域の主要産業であったデーツの収穫や真珠の採集とも密接に結びついたのでした。それらの最盛期はほ



クウェイトのスークにあるデーツ専門店(2019年8月)。

ぼ同時に発生し、それはまた商業活動の停滞期にもあたため、港町はほとんど無人の地と化し、他方、通常は人もまばらなデーツ農園や真珠の漁場は大変な人でにぎわいました。こうした季節風のリズムと合わさった人びとの暮らしの営みとして収穫されたデーツが、たとえば、その後、やはり季節風を使つてインド洋を出帆した北米船に乗つてニューヨークの人びとにとつて感謝祭の風物詩になつていったのです。

お問い合わせ、お申し込みはこちら

友の会はいつでも、どなたでもご入会いただけます。

国立民族学博物館友の会

一般財団法人 千里文化財団

〒565-8511 大阪府吹田市千里万博公園10-1(国立民族学博物館3階)

電話：06-6877-8893(平日9:00~17:00)

FAX：06-6878-3716

e-mail：minpakutomo@senri-f.or.jp

https://www.senri-f.or.jp/minpaku_associates/



年末年始休館・休業のお知らせ

国立民族学博物館と友の会事務局は下記の期間、休館・休業いたします。

【国立民族学博物館】

2019年12月28日(土)~2020年1月4日(土)

※国立民族学博物館は1月5日(日)から開館いたします。

【友の会事務局】

2019年12月28日(土)~2020年1月5日(日)

※第496回友の会講演会は1月11日(土)に開催いたします。

2020年もみなさまのご来館をお待ち申しあげております。